

# 発達臨床心理学コースと相談センター

## : 15年を振り返って

篁 倫子 お茶の水女子大学基幹研究院

### はじめに

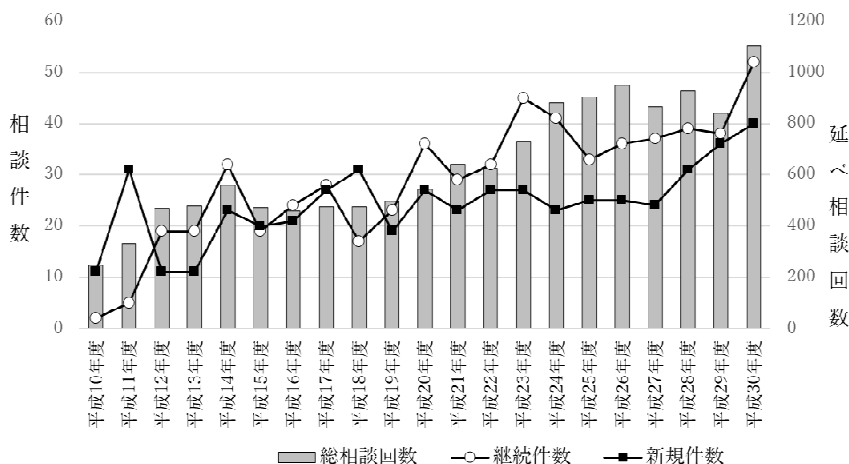
この度は、筆者の定年退職に際し、特頁を設けてくださることになり、大変恐縮している。平成18年（2006年）2月に本学に着任してから、延べ10数年間、心理臨床相談センター長を務めさせていただいた。このように長きにわたり、一人の者がセンター長を務めることになったのは本コースの事情によるものであるが、決し望ましいことではない。センター長としての仕事を振り返れば、実現できなかったこと、やり残したことがとても多く、忸怩たる思いである。本稿では、センターの歴史と活動実績を簡単に紹介し、相談センターとの15年を振り返り、所感を述べたい。

### 1. 心理臨床相談センターの活動実績

相談センターはお茶の水女子大学附属の発達臨床心理相談室として平成10年（1998年）に開設された。平成16年の国立大学法人化に伴い大学は改組され、その中で相談室は心理臨床相談セン

ターに改名された。そして、平成18年には立派に改築された大学本館の2階と1階に相談室がオープンした。幸運にも筆者はびかびかの教室と相談室でキャンパスライフをスタートすることになった。相談室の広さや設備は、病院小児科での臨床が長かった筆者にとっては感動的に整ったものであったが、部屋の確保と準備には、さぞかし先生方のご苦労されたであろうと拝察する。関係者のご尽力に改めて感謝したい。

ここで、紀要に掲載されている報告を参考に、センターの活動実績を振り返ることとする。開設以来の活動実績として、相談件数、来談者の年齢内訳、相談内容（主訴）内訳の推移をそれぞれに図1～図3に示した。新規受理件数は平成13年まで10件あまり、平成14年度から平成27年度の14年間は年間おおよそ20件～30件の間を推移していた（図1）。そして、平成28年度以降年々増加し、平成30年度には40件に達している。一方継続件数も、年度により増減はあるものの、開設



※ 継続件数および新規件数は左軸、総相談回数  
図1. 相談件数および相談回数の経年推移

以来増加しており、総じて面接の延べ回数は平成30年に初めて1,000回を超えた。センターの相談活動は着実に、徐々に広がりを見せていると考えられる。

また、これをセンター員数に照らしてみると、心理臨床相談センターへと改組された平成16年度は院生、外部相談員、教員を合わせて56名の相談員であったが、平成16年度からが教員定数が6名から5名に減じたため、学生数も減る傾向にある。ここ4年間の相談員は53名、47名、45名、53名と増えることはない。つまり相談員一人当たりの担当面接回数は増える傾向にあり、相談員は忙しくなっているが、実習機関としては充実する方向にある。

次に、来談者の年齢(図2)は年度によって変動があるが、本センターでは13歳~18歳の思春期の件数が学童期と比べても少ないと言えるだろうか。また、乳幼児から就学前までは乳幼児健診を軸に、発達相談や療育が近年拡充されており、自治体や医療機関でのケアが中心となっている。

一方、小・中学校では学校、スクールカウンセラー、教育委員会などによる対応が可能である。本センターは発達臨床心理学を学問と臨床の基盤としていることが、学童期の利用者が多いことと

関連しているのかもしれない。また、公的な心理教育的支援がほぼなくなる高校生以降成人期では、大学附属心理相談センターや私設相談機関の利用が多くなるだろう。本センターでも成人期来談者は以前から一定の割合を占めている。

一方、来談者の相談主訴・内容(図3)について、分類カテゴリーを修正した平成20年から現在までを概観すると、学校・教育関係、発達の遅れ・偏り、性格・行動関係、対人関係、子育てについての5領域は、来談者の年齢と関連することであるが、各領域が占める割合に大きな変化はない。

相談センターの朗報として、長年の願いであった相談センター向けのスタッフが令和元年(2018年)より教務補佐として配置されることになった。この年は学部心理学科が開設され、公認心理師対応の学部カリキュラム、大学院カリキュラムを準備することになり、学内実習の場である相談センターはこれまで以上の機動力が求められる。ようやく大学で新たに予算化され、相談センタースタッフ2名(延べ週3.5日)が採用された。学内実習、インターク面接、センター事務を担当していただくなど、センターにとっても学生教育にとっても重要な存在である。センターの活動実績にも既にその効果は表れている(図1)。

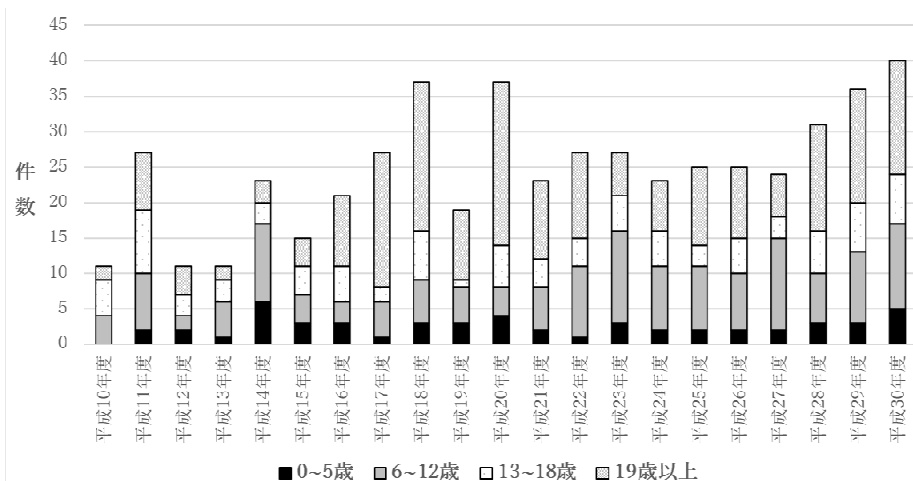


図2 新規来談者の年齢推移

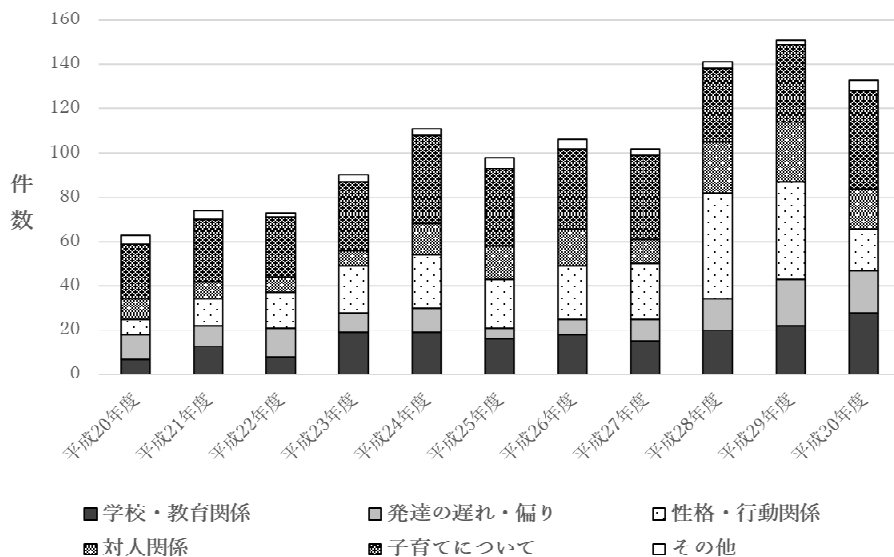


図3 主訴・内容別相談件数推移

## 2. 相談センターに求められること

初めて書いた巻頭言第9号で、相談センターが心理臨床活動を通じて地域社会へ貢献することを使命とするが、実際は地域とのつながりから我々が受ける恩恵が大きいと述べた。この活動において、在任中最も注意を払ったことの一つは情報管理の徹底である。本学の研究倫理や情報管理に関する規定に則り、相談センターではさらに個人情報の漏洩防止や守秘義務についての内規を設けてガイドラインを作成している。そして、相談員は相談センターオリエンテーションやカンファレンスなどで学期ごとに説明を行い、誓約書の提出並びに相談員終了時の情報返還・廃棄届けの提出を義務づけている。ただし、規則を遵守することに全神経が注がれてしまい、面接での生きた交流が滞ってしまうこともある。特に、前期課程1年の学生にとってはケースを担当することがとても大きなストレスになることも心配である。

## 3. 紀要に思うこと

発達臨床心理相談室の紀要「発達臨床心理学

第1号」は平成11年12月に刊行された。初代相談室長の楡木満生先生は巻頭言にて、相談室の開設は昭和の児童学科まで遡る、何十年もの学生と教員の夢だったと記されている。第1号は事例研究が5本と、意気込みと熱意が溢れた相談室紀要にふさわしい創刊号となっている。しかし、その後は、調査研究や文献研究が主体となっており、センター紀要の本来の活動報告と言える事例の報告が極めて少なくなっていることは常々残念に思っている。そこには、博士前期課程を2年間で修了していく学生が、担当事例を紀要に投稿することが時間的にも技術的にも難しいこと、来談者から承諾を得るシステムが十分に整っていないことなど、いくつかの理由がある。この状況を改善する工夫ができなかったことは、やり残した大きな仕事である。

ただ、ここ数年は受理件数並びに相談回数の顕著な増加と共に、掲載論文数も第19号9本、第20号8本、第21号9本と増えている。相談活動が活発になることが投稿意欲にもプラスの影響を与えているとすれば、嬉しいことである。

#### 4. 思い出は学生と出会い、関わられたこと

本学に奉職して一番ありがたかったのは学生に恵まれていること、と常々知り合いに話してきた。自慢気に聞こえたかもしれない。授業や研究指導においてのみではなく、臨床活動や相談センターにおいても、学生がしっかりとその役割を果たしていることに感心させられた。

学生の知的能力の高さ・学力の高さはお茶大だからこそではあるだろうが、本コースの学生たちはなぜか素直さ、優しさ、勤勉さ、誠実さ、責任感の強さを、学生それぞれの割合（これが個性）で持ち合わせている。大学院には子育てを終えて一念発起で大学に戻られる方もいるが（特に算研には多かった）、年齢を問わずこの特質は共通していた。学生に助けられ、刺激され、癒された教員は筆者だけではないだろう。

このような学生の成長は実に嬉しく、眩しいと感じる。その「育つ」過程で一翼を担えたとすれば法外の喜びである。

学生の気質・行動も平成の間に変容してきたが、修了生・OGが臨床の現場で上司や同僚、クライアント・利用者から相応の信頼と評価を得ていることは、コースへの人材募集や実習の案内が多いことから、間違いはないであろう。メディアでスポットライトが当たるようなOGは見当たらないが、心理臨床を堅実にやっていたらこそ、安堵している。

#### 5. お世話になりました

着任して以来、井原成男先生、藤田宗和先生、私を挟んで、青木紀久代先生、伊藤亜矢子先生、そして岩壁茂先生の6人体制が10年あまり続きました。研究指導、臨床指導に加えて研究、大学業務など、それぞれが大変忙しくされていましたが、先生方のお力と献身があってこそ相談センターがその使命を果たすことができました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

コースとセンターに欠かせない存在がコースの

アカデミックアシスタント（AA）の方々です。斎藤美和さん、補佐の三藤智子さん、平成23年度からは中島直子さん、補佐の三橋礼子さん。この方々はコースと相談センターを円滑に機能させる真の立役者であり、いつも学生と教員を助けて下さいました。お茶大OGとしての自負と愛校心あつてのことですが、心より感謝申し上げます。

#### 6. 時代と共に、時代を超えて

ここ数年で教員の退職・転出が続き、筆者の退職を持って、相談センター発展期を支えたスタッフは岩壁先生だけになり、コースはすでに一新されつつあります。不惑ながら若い力と和みの空気を入れてくださった石丸径一郎先生と高橋哲先生。そして、令和3年度には2名の女性教員が加わります。また、今年度からAAを引き継がれた山路晴美さん、心理学科AAの高橋正子さん、センター教務補佐の赤羽さん、福澤さんと一気にスタッフ交替が進み、全体として若返りました。

令和の時代は急速に進められるデジタル化、with〇〇〇で始まりましたが、新しい時代に現れる人の悩みや問題も変わっていくのでしょうか。相談の内容と形も多様化していくのでしょうか。次の時代の心理相談の在り方を見据えながら、これからも心理臨床相談センターが学生にとっても利用者にとっても、安全であり、挑戦できる場で在り続けることを祈ります。

<付記> 本稿の図表作成において、お手伝いくださった博士後期課程早川真桜さんに御礼申し上げます。